吸血鬼っていいもんだね

ハイたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼っていいもんだね

【Ｎコード】
Ｎ０８７１Ｒ

【作者名】
ハイたん

【あらすじ】
人間の血を糧にする人外の話

くっくっく。
まず初めに断らせてもらおうか、私は人間ではない。
空をも飛ぶ異能を持ち、人には忌み嫌われ、そして――人間の血を糧とする人外の存在である。
くっくっく。
恐ろしいか、恐ろしいに違いないだろうね。
しかし恥じることはない。誰だって私を見れば、諸君と同じようにパニックに陥ってしまうからな。当然の反応と言えるだろう。
くっくっく。
人間というのはつくづく愚かな生き物だと思う。私たちという存在を知覚していながらも、完全なる殲滅を成しえることが出来ないのだから。まあこれだけ私たちが、人間社会に紛れ潜むようにして生きているのだから、ある種では仕方ないと言えるかもしれんね。
地球上でもっとも個体数が多く、そして知能が優れているヤツらだが、私たちを打倒するにはいささか力不足のようだね。ご愁傷様です。
くっくっく。
私たちというのはつくづく素晴らしい存在だと思う。なぜって、アレだ、人間には真似のできない数多くの能力を持っているのだからな。
なによりヤツらから血を吸って生きているのだ。そして子を成し、我らはますます繁栄していく。人間が考えた”食物連鎖”とやらを持ち出すなら、私たちは彼らの上位に存在するのではないかな。
くっくっく。
それにしても人間の血は美味しい。たいへん美味である。
私たちに吸血されるしか能のないヤツらではあるが、いやはや、あの真っ赤な血はとても美味しいね。麻薬など比べ物にならないほ

どの中毒性だよ。一度口にしてしまったが最後、きっと我らは死ぬまで血を追い求めるのだろうね。
くっくっく。
さあて、今夜も盛大にいこうか。狩りをしようか。
――人間どもよ、せいぜい逃げ惑うがいい。そして赤い血をたっぷりと飲ませてもらおうじゃないか――
くっくっく。

ジメジメと蝕むような湿気を含んだ――いやいや、夏の夜というのは堪らないね。じっとしているだけでも生気を吸い取られていくようだよ。
でも夏は嫌いじゃないね。人間という生き物は非常に愚かなヤツらで、毎年この季節になると、売女のごとく肌を露出させるんだ。言葉すら出ないね。己の血を吸われることよりも、汗をかくほうが我慢できないらしい。
まあおかげで昨日の夜も、一昨日の夜も、たっぷり血を吸わせてもらったから良しとするかな。ひひひ、背後から迫り寄る私に気付いたときの、人間の反応といったら――笑いが止まらないね。
今日も私は狩場に向かう。公園っていうのはいいモノだ。人間が創り出したモノの中で、私が唯一大好きなモノだ。生い茂った緑は体を隠すのに最適だし、なにより――こうして夜になると寄り添った男女がよく現れるんだよ。カップルっていうのかな、手なんかも繋いでとても楽しそうだ。
だが、木製のベンチに座り込み、幸せそうに談笑している姿など滑稽に思えてならないね。潜んだ私に気付きもせず、甘い声でたがいの名を囁きあっているのだ。これを笑わずして何を笑えというのか。

人間っていうのはアレだな、得てして自身に対する危機感が薄いのだ。他人が襲われた話を耳にして、ならばと自衛の手段を徹底的に練るヤツなんて稀だ。大抵の人間は、自分に危機が及ぶことなどありえないだろう――そう高を括っているんだね。

まあそれも分かるよ。なんせ数十億分の一なのだからね。まさか己が貧乏クジを掴まされるだなんて夢想だにしないだろう。

――おっと。

人間を嘲笑ってやっている間に、どうやら状況が変わっていたらしい。ベンチに腰掛けている男女が、獣のごとく発情しているではないか。

まさに蛇のごとく舌を絡ませあって、猿のごとく身体をまさぐりあう。いやはや、ハイエナのごとく貪欲だね。

別にいいのだけどね。結局のところ私が襲いやすくなっただけのことだ。

いよいよと狙いを定める。チャンスは一瞬だ。逃げられでもしたら目も当てられない。私みたいな、人の血を糧にする人外の存在にも、やっぱりプライドってもんがあるからね。

ふむ。

獲物は二人いるのだが、やっぱり女のほうを狙うかな。スベスベとした白い肌など生唾ものだし、体内に流れる血液も男と比べて美味しい気がするからね。ひっひっひ、たっぷりと陵辱してやるから覚悟するのだな。

さてと、ではパーティを始めるとしようかな。御託も並べ飽きたし、口ではなく行動で示そうではないか。私がどれほど優れた存在であるかをね。

――レッツ、ショータイムっ！

風のように俊敏。火のように怒涛。水のように流麗。雷のように一瞬。

地を這うしか能のない人間を見下すように、私は華麗に空を飛んでヤツらに襲い掛かった。

空気を劈く音――がしたような錯覚。
世界が私に畏怖――するぐらいの自信。
さて人間よ。とうとう私はやってきたぞ。今からお前たちの血をこれでもかと吸いまくってやる。チューチューしてやるぞ、チューチュー。げっへっへっ。
私は獣のように盛った男女――その女の首にかぶりつく。いざ、
――食らえっ！　我が必殺の――！
「あ、ミユキ。動くなよ」
ペチっ。
瞬間、想像を絶する苦痛が体内を駆け巡った。
――ば、バカな……この私が、人間の血を糧にして生きるこの私が……きゃつらに遅れを取ったの、か――
意識が薄れていく。現実が夢に浸食されていくように、”私”があやふやになっていく。それはどこまでも泡沫だ。
血が流れる。真っ赤な血が。私が人間から吸いまくってきた血が。その光景はどこか夕日に似てノスタルジックである。それはきっと、夜を迎える象徴たる黄昏と、今際に吐き出す血液が、同様に紅い色によって彩られているからだろう。
「うん？　どうしたのよ」
ペチっ。
――あ、ダメだ。私、死んじゃいます。
「待って、まだ動くな」
ペチっ。
――ぎゃー。
「痛っ――んもう、さっきから何なのよ」
薄れゆく意識の中、ふと見えたのは得意気の男の顔だった。
「いや、蚊だよ蚊。まったくこの季節になると性懲りもなく出てくるよな」
くっくっ……くっ。
そう……褒めないで、もらい……っ、たいね。

私は――人の血を吸って生き、る――

「えいっ！」

ブチっ。

女が男と手を合わせるようにして、私の弱った体を押し潰す。

――さらば我が同志たちよ。私は先に往く。朗らかに笑って逝く。ここに一人の勇敢なる同族が死んでしまったが、しかし諸君らには己に自信を持って生きてもらいたい。私たちは素晴らしいのだ。人の血を糧にするような人外の存在なのだ。

くっくっく。

くっくっく。

くっくっく。

くっくっくっ――はーっはっはっはっはっはぁ！　……ふむ。

あーあ。

つぎに生まれるなら蚊じゃなくて、吸血鬼とかになりたいもんだね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0871r/

吸血鬼っていいもんだね

2011年8月27日03時24分発行